

# 神代の概念

茂木英三郎

## 第一章 序 論

### 第一節 緒 言

### 第二節 我國神代史の意義

### 第三節 我國神代史の範圍

### 第四節 經濟史との關係

## 第一章 序 言

### 第一節 緒 言

輓近我國史研究の極めて盛んなるは誠に慶賀すべきことである。史學史上口碑時代より漸く記錄時代へ移りつゝあつた我國神代史の史實を究明することは決して容易な業ではない。我國神代史研究に於て學者間に今日尙異論紛

々たるは研究至難な點に於て當然の如く思はれる。或學者は記紀、諸國の風土記、古語拾遺、其他の雜書等より、我國神代史を演繹歸納せんとし、或學者は哲學的に歐米思想を取り入れて説明せんとしてゐる。其他最近は史的唯物論を基礎として、マルクス、エンゲルス其他の唯物論者の著述に則つて、當て箴めの説明を加へんとする運動が盛んである。而して一部の學者は信仰を基礎として、神靈研究に没入し、神靈の御稜威を得て、今日の最も進化せる科學的智識に照らし以て我國神代史の不動の基礎付けをなしつゝある。その研究手段方法の如何を問はず諸學說の眞偽の檢討は目下學界に於て最重要事項の一として數ふべきであらう。予の以下論述せんとする「神代の概念」は、今日迄敬神崇祖四魂是足の惟神の道信仰によつて先輩諸兄の得られた材料を基礎に勝手な項目を作つて羅列したに過ぎない。茲に注意すべきは曩に神典古事記の至上至尊の我國神代史研究上の文獻たる所以を明かにせると同時に、今後の神代史研究の基礎は全く古事記によると述べし事である。一體神代とは如何なる時代かと言へば、人間社會の出来る以前即ち我國土上に於ける神と種々なる動植物の社會が靈界に於て形成せられてゐた時代を云ふのであつて、即ちこの時代に於ては未だ空氣は存在せず今日の科學用語で云ふ所謂エーテルの世界即ち靈界であつたのである。今日も尙エーテルの世界即靈界が存在し、その世界の中に動物も、植物も、人間も空氣も存在してゐるのである。神はこの靈界に在つて無死無終の活動を遊ばし宇宙を觀察してゐるのである。人間は人間固有の意識を以て空氣と云ふ物質の世界に生存し、この限局せられた世界から宇宙觀自然現象を説いてゐるのである。而して我々人間には靈界の現象を分明することは不可能である。ただ神や靈や光や磁氣其他の光線等の如き總てエーテルの

世界の運動が物質の世界に變化を及ぼしたときに始めて之を感覺することが可能である。然れども反對に靈界にある神や靈物或は動物は我々の物質界を觀察出来るのである。斯の如き靈界に於ける人間の社會の未だ出來てなかつた時代の神々の事跡が書いてあるのが古事記の神代の記である。

## 第二節 我國神代史の意義

「我國の神代史とは日本國土上の各先住民族の起源及び之れと關係ある神の歴史を記載せるものである」(岸博士著「眞の日本精神」頁四〇)

我神代史が多數學者の稱ふる如く宇宙創造史として記述してあるか否かによつて、古事記を西洋諸國の神話傳説等と同價值と見做すか否かに分れるのである。我々は我國神代史が決して宇宙創造史として記述してあるとは思へないのである。それは古事記それ自身の解釋上からも現代科學の合理的解釋上からも推論せられることである。古事記をして宇宙創造史の如く誤解せしむるに至つたものは、日本書紀崇拜者達が日本書紀中に記載せられてゐる次の如き文句と古事記の劈頭にある「天地初發の時」なる文句と同意義に解釋するに至つたからである。

古天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙、及其清陽者、薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合博易、重濁之凝場難、故天先成而地後定、然後神聖生其中焉、故曰、天地開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、干時天地之中生一物狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、次國狹狹尊、次豐斟淳尊、凡三神矣、軌道獨化、所以成此純男。

而して讀者も理解出来る如く右の日本書紀の文章は、日本書紀の編纂者達が三五曆記、淮南子、春秋緯等の漢書より類似の文句を持つて來て書いたものである。古事記は日本書紀其他の神話傳説等と全く異なり、宇宙創造に就ては寸毫も記載して居らない。而して「天地初發之時」とは天地創造は既に成つて地球は凝固して居り、大體土地の區域は定まつて居た時の我大八島國の開ける初發（波自米能登伎）の時と云ふ意味である。神典古事記は所謂國史であつて、宇宙の複雑なる諸現象を記録するものではない。純粹に我が大和民族の此の東洋の島帝國に於ける發達史を後世に胎すのが目的で明天皇の勅命によつて編纂せられたものである。既に述べし如く古事記の冒頭の一句天地とは日本國土の天地あめつちの發初の時といふ意味である。決して他國の天地の意味はない。次に難解の字句高天原とは學說種々あるも詳しく検討を後日に譲り此處では平易に解釋して我國の高原氣中を指したのである。既に靈界即ち今日の所謂エーテル界の説明に及んだが、このエーテル界中にある高原地帯の意味である。これも古事記の高天原とは日本國土にある高天原であつて天竺やメソポタミヤの高天原ではない。

### 第三節 我國神代史の範圍

神典古事記は我が大和民族が神代より人代へ遷移せし過程を明記してゐる。即ち神代は人代以前に嚴然として存在し、大和民族の祖先は他民族の移住混血によつて形成せられたものでなく、他民族の幾分の移住ありし以前に此の大八島帝國々土上に於て、神代に神と接觸交通を保つて居たものである。多數學者が大和民族の起源を説くに專

ら民族移動説を以てするのは、我々の祖先がこの國土上に於て神代に生息し人代に遷移せし過程を識らないからである。神代より人代への遷移は決して大和民族のみに特有な現象ではない。世界の他の民族も總て同じ過程を得て今日に至つてゐるのであるが、他民族間には我古事記に於ける如き明確な記録なき故に容易に理解出來ぬのである。一般に我が民族は他の民族に比してその遷移の時期が少し後れて最後に神代より人代へ遷移せし如くである。神代と人代との區別の明確な認識なきものは、徒らに神の實在を否定し、我が「神國」てふ世界無比なる國體の精華に一面識もなく、歐米思想、儒佛思想に眩惑せられて專斷的理窟屋に終始するに至るであらう。物質界あるを知つて非物質界即ち靈界あるを知らぬ者には精神科學の根本は決して理解出來得ない。

古事記は蝦夷神皇第七十三代神倭伊波禮比古命が又の名を神武天皇と申し上げて、人皇第一代に即かれてより人代へ遷移してゐることを記してゐる。「神代に於て天照大御神の皇孫命の魂の成りました御子として、民族を統御し遊ばして居られた神皇の御系統は人代となりて大和遷族を統御遊ばしてゐるのである。之を人皇第一代神武天皇と申されるのである。それ故に神武天皇は神代より人代へ遷移せられた神の御子であり、従つて皇室は御神裔にましまして民族の上に立たせ給ふのである……」(岸博士著「眞の日本精神」頁六〇)

一方人間は非物質の世界即ち靈界に空氣層が次第に濃厚となるに従つて、徐々に現時の如き狀態への遷移の過程を辿つたのである。勿論神武天皇即位の頃には人は立派に空氣呼吸をなし、物質的養分の攝取すら完全に行ふに至つてゐた如くである。人間が火食すら爲す様になつたのは、人類の増殖と共に生存競争がより烈しくなつて來た結

果、直接物質より養分を攝取する必要を生じたからである。斯くして神代即ち靈界に生活してゐた人間は次第に人代へと遷移して來たのである。物質の世界と非物質の世界との區別は、空氣の世界と質量なきエーテル世界即ち靈界との區別である。今日尙宇宙の大部分はエーテル世界即ち靈界でありその中に多種多様な神及び靈が實在するところなのである。人類も嘗ては靈界に生活し、それが次第にこの地球上に空氣層の濃厚となるに従つて呼吸には空氣を使用し、肺臓の瓦斯交換を爲し得るやうになり、物質より直接養分を攝取するに至つたのである。結局神代史の研究は靈界の研究になるのである。靈界の研究は幾多の興味ある問題を提供してゐるのであるが、茲には我國神代史と日本經濟史との關聯を主に研究しようとするのである故、靈界それ自身の研究や更に神靈學等の研究には言及しない。茲には努めて古事記を基礎に神代史の歴史的發展過程を説くことを主眼としたものである。非物質界即ちエーテル界に生存してゐた當時の動植物と今日のそれとの間に相違のあつたことは既に述べて來たことにより明かである。今日の物質科學一方の智識のみを以て我國神代史を解釋せんとすることは、恰も縱横のみを計つて立體の容積を計算するが如きものである。唯物論者が神の實在を否定し、斷片的な考古學的研究や、人類學其他の自然科學的見地より、マルクス・エンゲルス等の假說的歴史觀を盲信して、人類文化の總てを理窟付けんとすることは、今日の如き物質遍重時代に於ては一時的に許されることであらうが、より精神科學が進歩するに従つて益々滑稽視せられるに至るであらう。彼等が日本歴史を南洋アフリカ等に於ける野蠻民族史と同等に取扱つてゐるのは、彼等の精神科學が極めて幼稚だからである。精神科學は物質科學と同様に實驗觀察の二方法によつて、絶えず新ら

しい高度の進歩發展の過程を辿りつゝあるのである。「神代史の範圍を更に世界發達史上より云へば、我が神代の初めより瓊々杵命の天降りしました時代の出來事は、第三紀の中頃から始まり、第三紀の最新世時代までの間の出來事である」(岸博士著「古事記眞釋」上卷頁三二)「ヘッケル氏の記載する處によれば、先づ第三紀初期に、一番下等な猿猴類即ち擬猴類が出來、第三紀中新世に眞猴類が生じた。此の眞猴類の狹鼻屬なるものは、有尾類が先づ生れ類人猿がそれから生じた。第三紀最新世に至つて、類人猿の一種に言語を知らざる猿人なるものが生じ、夫れから遂に言語ある人類が生ずるに至つた」とある。故に伊邪那岐、伊邪那美神が類人、島を生み給ふた時代は、恰も第三紀最新世以後に當るものとすれば、天之御中主神の我が高天原に成りませし時代は少くも之れより以前であつたのである。今日の我々日本民族の同化せられて一新民族を形成せられたのは、世界民族中最近のものであるのであるが我が高天原に天之御中主神が成り座した時は、既に魚類、兩棲類、爬蟲類及び中古時代の哺乳類は生じ、又胎盤類は盛に發生して居た時代である。

而して由來陸地の侵略と云ふ點から考へれば植物は動物よりも先驅者であつた。動物は植物の後を追ふて陸上に移住したものなるが故に、天之御中主神が高天原になりませし時代には、植物は大に繁茂して居たのであるが、浮游性のものも尙勢力を有して居た時代であつたに相違ない。夫れより漸次本質の大なる植物が増殖し、伊邪那岐、伊邪那美の神以前には大なる植物が繁茂して居たことは明かである。而して瓊々杵命の天降りしました時代は相當暖き時代であつたといふことである。斯く我國神代史を檢討して行くならば、我國神代史が決して宇宙創造史に非ず

して自然科学的にも合理的に解釋がなし得るのである。

#### 第四節 經濟史との關係

以上述べし如く、我國神代史は神代に於ける大和民族の發展過程を記載してゐるものであつて、所謂非經濟的事項がその大部分を占めてゐる如くであるが、神代に於ける經濟主體たる諸靈の研究諸靈と物質との關係、其他人類文化に於ける如き神代文化を營むで居りし、その跡を深く研究することは、人代の總ての要素基礎を包含する故に且つ日本經濟史研究上より觀るも、聊かもゆるがせに出來ぬものである。我々は以下常に神代と人代との區別を明確に頭に刻んで神代文化の何んたるかの研究に進まんとするものである。(續く)